

John Ehrlichman
THE CHINA CARD

ジョン・アーリックマン

下 新庄哲夫＝訳



チャ
イ
ナ
カ
イ
ナ
ド

John Ehrlichman

THE CHINA CARD

ジョン・アーリックマン

新庄香夫訳



藏

章



チャイナ・カード (下)

ジョン・アーリックマン

1990年9月30日 初版発行

訳者 新庄哲夫

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話 (営業) 03-817-8521

(編集) 03-817-8451

〒102 振替 東京3-195208

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

装丁者 渋川育由

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Printed in Japan

ISBN4-04-791183-6 C0379

チャイナ・カード
(下)

THE CHINA CARD

by

John Ehrlichman

Copyright © 1986 by John Ehrlichman
Japanese translation rights arranged with
Simon & Schuster, Inc., through
Japan UNI Agency, Inc.

第四部 (承前)

チャイナ・カード(下) 主要登場人物

- マシュー・トンブソン……キッシンジャーのスタッフ、大統領補佐官
リチャード・ニクソン……合衆国大統領
ヘンリー・キッシンジャー……国家安全保障問題担当大統領補佐官
アレクザンダー・ヘイグ准将……国家安全保障問題担当大統領補佐官代理
エモリー・レイサム……マシューと洪の連絡役
洪偉浪……香港の大実業家、海運業者
王麗花……周恩來の秘書兼通訳
J・エドガー・フーバー……FBI長官
林彪……中華人民共和国国防相、妻Ⅱ葉群、息子Ⅱ林立果
周恩來……中華人民共和国総理
鄧善礼……元中国外務省高官
楊徳重……周恩來の秘書兼ボディガード
H・R・ホールドマン……大統領首席補佐官
ウィリアム・ロジャーズ……国務長官
毛沢東……中国共産党中央委員会主席
グレナ・ハリソン……ホワイトハウス秘書、マシューの元恋人
メアリー・フィン……元連邦検事補、マシューの恋人
ジョン・オズボーン……ニュー・リパブリック誌の記者

第二十九章

マシュー・トンプソンがワシントンDCで初めてエモリー・レイサムに会ったのは、リチャード・ニクソンとヘンリー・キッシンジャー、その他数十人の随行員が——その中にはアレグザンダー・ヘイグ大佐も含まれていたが——一九六九年七月から八月にかけて、ものものしい世界歴訪の旅に出ている間のことだった。マットがレイサムに会ったのはニクソンが三人の宇宙飛行士の地球帰還を太平洋上で出迎えた少しあとのことであり、またバキスタンの独裁者がアメリカ大統領一行を盛大にもてなし、ご機嫌を取る以前のことであった。その日、仕事から帰ると、マットは郵便箱の中に数枚の請求書や案内状、それにフィレンツェから送られたメアリー・フィンの絵葉書にまじって、簡単なタイプ印刷のメモを見つけた。

メモにはこう記されているだけだった。

公文書館
独立宣言
午後四時
明日

メアリー・フィンから来た、ミケランジェロのダビデ像が写っている絵葉書にはこう書いてあった。

そのうちと一緒にフィレンツェへ参りましょう——それも近いうちに。どこよりもロマンチックな街よ！ わたしはもだえ、苦しみ、ひたすらあなた（あるいはダビデ）を求めています。愛をこめて、
M。

マッシュューはメアリー・フィンの絵葉書について笑いをもらしたが、しかしみぞおちに不快感を覚えた。もしヘイグやヘンリー、FBIが盗聴を行なっているのなら、郵便物も読んでいるにちがいがなかった。国立公文書館のロビーでの待合わせを監視するために、あすFBI捜査官が張りこんでいるのだろうか。異^{わな}かも知れなかった。見きわめなければならぬのだ。

マットは、無記名のメモを丁寧に折りたたんでポケットに入ると、アパートから数ブロック離れた商店街にあるリッグス銀行へ行き、三巻き分の二十五セント硬貨を手に入れた。タクシーを呼び止めてワシントン・ヒルトン・ホテルまで行き、ほら穴のような会議室が並ぶ階に向かう下りのエスカレーターに乗った。

マット・トンブソンが折れ曲がる廊下の端まで二十メートルあまり歩くと、さほど使用されていない通路の薄明かりの中で、六台の公衆電話が並んでいるのが見えた。香港の洪オフィスにつながるまでに数分かかり、国際電話のオペレーターが請求する硬貨を次々と投入するの、さらに一分近くかかった。「やあ、マッシュュー」洪偉浪のかすかな声がした。

「きょう、何者かからメモを受け取りました。指定された場所へ行ったものかどうかと思ひましてね。僕は監視されているかもしれないです」出しぬけにマットは言った。自分の声が大きすぎるのに気が

ついた。しかしエスカレーターを見渡したものの、コンコースには人影もいなかった。少なくともFBIはここまでは尾行していなかった。どの電話を使用したかわからない以上、この通話を突き止められる心配はない、マットはそう確信した。

「メモの目的は——話していて大丈夫ですか」洪が問いたです。

「はい」

「結構。この番号へ電話して、あなたの名前を教えてください。二〇二―五五五―四七三六。新しい連絡の手はずが整いつつあります」

「わかりました。さようなら」

マッシュューは洪に教えられた番号をフェルト・ペンで、ステンレス製の電話カウンターに書いた。番号を頭にたたきこむと、ぬらした指先でこすって数字を消し、別の電話機に移って五五五―四七三六を回した。呼び出し音が八回鳴ったあと、マットは受話器を置いた。

アパートでその番号をまわす勇氣はなかった。エスカレーターにもどってロビーへ上がり、コーヒ―・ショップまで歩いて行き、旅行中の数家族や、ラケットだの缶入りボールだのを揃えたテニスウェア姿の人妻ふたりにまじって列に並んだ。

うまくもまざくもないサラダとアイス・ティーを腹におさめたあと、マットはロビーのエスカレーターの背後にある六台の公衆電話を見つけた。狭い空間にとろ狭しと並んでおり、すべて使用中であった。これではどんなに注意しても、ほかの使用者に立ち聞きされてしまうだろう。マットはホテルを出て上着をぬぐと、コネチカット・アヴェニューの坂をデューボン・サークルに向かって下った。日は沈んでいたが、日中の蒸し暑さのせいで、黄昏時^{たごれ}とはいえず少しも涼しさを感じなかった。通り過ぎていく歩道やビルが、眼に見えるような熱波となって何倍もの暑熱を放っていた。最初のブロックでマットはネクタイを取り、シャツのボタンを二つはずして袖口を折り返した。Rストリートのずっと先の街角にあ

る公衆電話で足を止め、受話器を持った手で上着とコインをぎこちなく握りながら、もういちど例の番号を試してみた。

洪が教えてくれた番号をまわすと、最初の呼び出し音で一人の男が応答した。「もしもし？」ためらいがちなかほそいテノールの声は、局外者かまたは誰かの代理で電話に出ているだけといった感じだった。

「もしもし」とマット。「こちら、マシュー・トンブソンです」

「はあ？」

「ええ。この番号に電話して名前を言うようにと」

「わかりました。お名前をもう一度おっしゃっていただけますか」

「マシュー・トンブソンです」

「マシュー・トンブソン？」

「はい」おそらく洪は、自分が電話をすることをこの男に伝える機会がなかったのだろう、とマットは思った。

「こちらからあなたへ電話できる番号がありますか」

「まさか。ありません」

「では、今夜またかけ直してもらえますか。六十分以内に」

「わかりました」不意に電話の切れる音がマットの耳もとに響いた。受話器を置いて、あたりを見まわした。コネチカット・アヴェニューの彼が立っている側には、一ブロック間のどちらの方向にも歩行者は一人も見当たらなかった。小犬を連れた婦人が、Rストリートを半ブロックほど向こうからこちらへ歩いてきている。

時間潰しには、酒場か映画館が涼しくていいだろう、とマットは考えた。酒は駄目だ。さえた頭でい

なければならぬのだから。デュボン・サークルのすぐ下に映画館があったのを思い出したので、ぶらぶらとそちらへ歩いて行つた。サークルを越えないと、劇場の底は見えな^{ひまし}いだろうけど、しかしそんなことはどうでもよかった。

デュボン・サークルの向こうにある映画館では、『アルビオン・アゲイン』とかいう映画を上映していた。マットは四ドルを支払つて館内に入つた。ロビーの冷房は効きすぎていて寒いほどであつた。上着を着てシャツのボタンを掛ける。十数人の観客がいるだけで、二百席の間にばらばらと座つていた。マットは一番後ろの座席に座つて、退屈な映画や出入りする人々を慢然と眺めやつた。自分を捜している者は一人もいそうになかつた。

ロビーには、人気がない売店の休憩カウンターの脇に公衆電話が一台あつた。マットが五五五―四七三六をまわすと、最初の呼び出し音ですぐに相手が出た。

「もしもし」今度は別の声が出た。声の高さは変わらないにしても、前ほどのためらいがちな声ではなかつた。

「マシュー・トンブソンです。少し前にお電話した者です」

「はい、ミスター・トンブソン。先ほどは留守にしていまして申し訳ありません。公文書館に何か問題があるんですね？」言葉のリズムに確固としてきっぱりした響きがあつた。

「ええ、郵便物が盗み読みされていたのではないかと思つたものですから」マットが説明した。

「なるほど。いま、ご自宅ですか」男の背後で流れているラジオのクラシック音楽がマットの耳に入つた。

「いいえ。映画館の公衆電話です」

「結構。場所はず」

「デュボン・サークル近くのコネチカット・アヴェニューです」

「結構。エル・ボデゴンをご存じですか」

「もちろん」

「歩いてそこまで行ってください。入口のところで数分後にお会いしましょう。あなたの友人からメッセージをこづかっています」

「誰です？」

「尋ねられたら、王麗花の名前を挙げるようにと言われました」

「オーケー。すぐそこへ行きます」

冷蔵庫のようなロビーから外へ出ると、重い湿った毛布のような蒸し暑い夜気がマットを待ち受けていた。汗が顔と腋の下に吹き出しはじめたのを感じたので、またまた上着をぬぐ。わざとデュボン・サークルを目差し、そのまわりを半周してからニュー・ハンブシャー・アヴェニューを北東に二ブロックほど進み、Rストリートを東へ向かった。途中、黒人居住区を通りぬけたが、そこはいつもマットが不安を覚えるところであった。この地区は今にも爆発しそうな、物騒で汚れた、希望のほとんどない「ワシントンの夏」の典型だった。数年前にここで、夏の暴動が発生しているのである。かしいだ鋼鉄の門が、明かりの消えている店の正面を防護していた。ランニング・シャツ姿の黒人たちが、老朽化した褐色砂岩造りの階段にたむろしていた。

十七番街とRストリートが交差する街角のところで、エンジンをふかしながら二重駐車している三台の空車タクシーが目に入った。Rストリートの一ブロック先にある、とっつききの二つの建物の中に店を構えている二軒のスペイン系レストランの真ん前だ。ラ・フォンダとエル・ボデゴンが軒を並べて、サルサを楽しむ客を分かち合い、町の外からやって来る客を混乱させていた。『ワシントンニアン』というコラムでレストラン評論家がいみじくも評したように、二軒は敵地で手をたずさえる活発な娘とその男っばい伴侶といった趣があった。

マットはエル・ボデゴンの正面入口になっている急な階段の下まで行き、照明の中に立って四方を見まわした。ハンカチで顔を拭^{ぬぐ}ってから折りたたみ、さらに上着を折りたたんで肩にひっかけた。一分後、一台目のタクシーのドアが開いて一人の男が降り立ち、マットのほうを見やった。

身長はマットと同じくらいだが、痩^やせぎみで、ゆったりした白い半袖シャツにびたりと貼りつくリールバイス、茶色のモカシン靴、そして白い運動用靴下という身なりであった。すぐにマットは、不釣り合いなほど筋肉が盛り上がっている男の腕に気がついた。体つきは腕と肩を除けば、全体的にきやしやに見えた。

男はマットに近寄り、もの静かに話しかけてきた。アクセントと口調は南部風で、語尾を上げて伸ばし、電話のときほど断定的な口のきき方ではないような気がした。

「マシュー・トンブソン？」

「そうですか」

「エモリー・レイサムです。先ほど電話でお話した者です」

「はい」

「どこかへ歩きながら話しましょう。ボデゴンはフラメンコショーをやっているさすぎます」

「どこへ？」

「十六番街へ参りましょう。スタトラーへ行けば一杯やれると思います」男はRストリートを東に進みはじめ、暗い陰の中に入って行った。

「ほんとに暑いですね。飲みものが欲しくなる。王麗花^{ワザリファ}からのメッセージをお持ちとか」レイサムと肩を並べて歩きながら、マットが訊いた。

「私のメッセージは実のところ、それほど詳しいものではありません。ですが、きわめて重大なものだと思います。あなたのかつてのクライアントがよろしくということです。ミス・ワンも同じです」

「それだけですか」

「いいえ。つまり、あなたと友人の連絡はますます取りにくくなっています。どうやら、それははっきりしているようです。だから、今後は私が連絡役になります」

「すべてに關して？」

「はい。私が充分信ずるに足る男であり、一時間の余裕をあたえてくだされば、いつでもあなたのお役に立つとわかるでしょう。私の口の固さは、あなたの友人たちも認めています、請け合います」

「どうすればいいんです？　かりに送りたい手紙を僕が持っていたとしたら？」

「私に電話をして、お互い確認した場所に手紙を置いてくれさえすれば、私がそれを回収しにいきます」

二人は十六番街に入って行った。そこでは新しい防犯灯が黄色がかった灰色の光を放っていた。マットはさらにまじまじとエモリー・レイサムを見やった。もう十年もすれば禿げあがるにちがいない、そうマットは判断した。灰色の頭髮はこめかみから後退しかけており、天辺と後頭部は薄くなりつつあった。対照的に琥珀色の縁付き眼鏡を通して眉は黒く、おそらく暗褐色かもっと黒っぽく見えた。整った顔立ち、隆起した鼻と薄い唇で平凡さをまぬかれていた。男は自信に満ちた力強い足取りで歩いた。

「キッシンジャーのもとで働いているそうですね」とレイサム。小声で話すので、通りの騒音で言葉の一部が聞き取れなかった。「さぞかし面白いことでしょう」

「中国へ行ったことがありますか」マットが尋ねた。

「私の話はしないほうがいいでしょう」レイサムが答えた。「単なる御用聞きだと考えてください」

「ですが、あなたが何者であり、どうして友人たちがこの役をあなたに命じたのか、興味を持つのは当然でしょう。僕に何も話したくないのですか」

「いいえ、話さないほうがいいのって一番いいのです。察するに、あなたは監視下にあるようです」

ね？」

「盗聴されていることを知りました。尾行はされてないと思います」

「私も同感です。あなたがエル・ボデゴンにやって来るのを、タクシーの中から見てました。どうして連中はあなたを盗聴してるんでしょう？」

「香港へ僕が電話をしたのが知れたからです。ミスター・洪をご存じですか」

「洪偉浪^{ハング・ワイラウ}？ 彼に電話をしたのですか」

「ええ。それに向こうからもかかってきました」

「それなら、向こうでイギリス側が彼を盗聴する可能性がある。あるいはNSAがこちらからあなたの話を盗み聞きしたかもしれません。いずれにせよ、キッシンジャーにはわかったわけだ」

「NSA？ 国家安全保障局のことですか。あれはFBIの——」

「いいえ、NSAは日常的に国際通話をすべて傍受しています。ある人々や特定の番号や場所へかけたり、かかってきたりする通話をコンピュータが選り出したり、連中が興味を抱いているさまざまな内容のやりとりをキャッチするのです。ホワイトハウスの職員は、一人残らずコンピュータに組みこまれているでしょうから、あなたの方全員が海外で何をやらかしているか、たえず追跡できるわけです」

「なるほど。今晚の場合はどうです？ 僕は公衆電話から洪に電話し、あなたの番号を教えてもらいました。それも連中に知れるのでしょうか」

「どこの電話です？」

「ワシントン・ヒルトンです」

「可能性はあります。洪の秘書が本人と話をしたとき、フルネームを使いましたか」

「使ったかも知れません。確かではありません」

エモリー・レイサムは街灯の下で立ち止まると、ペンと小型のメモ帳を取りだした。「これは私のも

う一つの番号です。安全を期するため、最初ではなくてこちらのを使ったほうがいいでしょう。もう最初の番号のところにはいいようにします」レイサムは五五五—三三〇三と記した。「歩きながら覚えこんで、メモは私に返してください。そしてかならず公衆電話からかけてください——毎回違う公衆電話を使うこと」

「わかりました。もう覚ええました」マットは眼を閉じると、番号を思い浮かべて口に出した。「五五五—三三〇三、そうですね？」マットはメモ用紙を見やって、レイサムに返した。「まさにスパイ劇じみてきましたね。こんなことが必要なんでしょうか」

「場合によります。あなたがわれわれの友人のために何か重要なことをなさるのを、邪魔立てしようとする者がいるのですか」

「えーと」マットは考えこむように言った。「いえ、まさか。しかし中国人の友人がいるとわかれば、僕はホワイトハウスを追い出されるでしょう。そうなれば、何ひとつ達成できません。おわかりですか」

「もちろん。だから、生活の一部を秘密にする必要がある」

「そのとおりです。あなたの場合はコンピュータに会話をキャッチされずに、どうやって東洋へ電話をするのですか」

「われわれが話をする場合、ふだんはあらゆる種類の紙を取り扱う商人にばけきるのです。コンピュータは紙などに興味を持ちません」

「すると、それが合い言葉みたいなものになるわけですね？」

「時には。だけど、あなたはそんなことをあまり知る必要はないと思いますよ。今後生じる危険のほとんどは、われわれが引き受けると思ってください結構です。それだけ知っていればよいのです」

なぜレイサムは「われわれ」という複数形を使ったのだろうか、とマットは思った。二人はソ連大使